

主よ、お話しください

サムエル記上 3 : 1 - 10



司祭 ヨハネ 井田 泉

2018年1月14日

顕現後第2主日

奈良基督教会にて

「主よ、お話してください。僕<sup>しもべ</sup>は聞いております」

これがわたしたちの教会の今年の年間聖句です。年間聖句は毎週の週報に書かれてあり、また信徒の方が墨で書いてくださって礼拝堂とベタニアに掲げられています。

この聖句はわたしが決めているのですが、それは年度の終わりに教会の現状を振り返りながら、神さまが何をわたしたちに呼びかけておられるのかを思いめぐらすなかで与えられたものです。

「主よ、お話してください。僕<sup>しもべ</sup>は聞いております」

わたしたちは話す。大事なことです。けれどもわたしたちが話している間に、神さまの声が聞こえなくなる。聞くことを忘れる。とすればこれはとても危険なことです。

いろんな課題を抱えて、たくさん心配したり迷ったりするわたしたちです。そのわたしたちに対して、神さまは何と言われるのか。神さまは何を語りかけておられるのか。わたしたちの教会に対して、この社会に対して、またわたし個人に対して。これを心の耳を澄まして聞きたい。神さまの思い、神さまの言葉の中に、わたしたちの希望があります。

「主よ、お話してください。僕<sup>しもべ</sup>は聞いております」

何度もこの言葉に立ち帰りながらこの1年を過ごしたいと願います。

さて今日、この言葉が旧約聖書の中に出て来たことに気づかれたでしょうか。サムエル記上第3章9節です。

時は、今から3000年以上前に遡ります。イスラエルにまだ王さまがいなかった時代。エルサレムにはまだ神殿はなく、簡素な神殿がシロという町にあって、そこがイスラエルの信仰と生活の中心でした。そのシロの神殿の奥には契約の箱——十戒を刻んだ石の板を納めた箱——が安置されており、その契約の箱を守るようにして、ひとりの少年が毎晩そこに寝ていました。名前はサムエル。年齢ははっきりはわかりませんが、10歳余りでしょうか。

サムエルはおよそ3歳のとき、両親に連れて来られて、神殿に仕える祭司エリのもとに引き取られました。サムエルは母ハンナの切なる祈りによって与えられた子どもであって、ハンナは神さまに約束していたのです。

「もし神さまがわたしに男の子をお授けくださるなら、その子の一生を神さまにおささげします」と。

その祈りが叶えられてサムエルが生まれ、ハンナと夫エルカナは、神に誓ったとおりに、乳離れした幼いサムエルを神にささげました。こうして祭司エリのもとで成長したサムエルは、エリの手伝いをし、神殿の仕事、礼拝の補助の役目をするようになっていました。

**「少年サムエルは主のもとで成長した。」2:21**

幼いときから神さまを身近に感じ、エリに教えられ、祈って成長していったサムエルには、すでに少年ながらも信仰が育っています。信仰が育つということは、神さまを中心に物事を考え判断する、ということです。純粋な正義感を宿すようになります。まだまとまった意見を言うということはなくとも、間違ったこと、不義不正に対しては敏感になり、そのゆえに苦しむ、ということが起こります。

サムエルは、その神殿で悪事が行われていることを知っていました。

問題は祭司エリの息子たちです。エリはイスラエルの信仰的指導者として、尊敬を受け、務めを果たしてきました。人々に神さまを教え、また人々の祈りとささげものを受けて神に届けるのがその務めです。しかし今は年老いたので、祭司の実務と権限は、二人の息子たちホフニとピネハスに移っていました。この二人が、不正を行っていたのです。

人々が神へのささげものを携えて神殿にやってきます。その最もよいところ、肉なら最上の部分を、神にささげる前に自分のものにして食べ、私腹を肥やしている。これが、人々にもっとも尊敬されていた神に仕える祭司たちの実態でした。

**「2:12 エリの息子はならず者で、主を知ろうとしなかった。」**

こうしたことに、敏感なサムエルが気づかないはずはありません。

老いたエリは息子たちを注意しましたが、その声は弱く、息

子たちの過ちをやめさせる決意と迫力を欠いたものでした。

「3:1 少年サムエルはエリのもとで主に仕えていた。そのころ、主の言葉が臨むことは少なく、幻が示されることもまれであった。」

主の言葉が臨むことは少ない。つまり神の言葉をほとんど聞くことができない、ということです。幻が示されることもまれであった。神が将来の姿、可能性と希望を示してくださらないのです。それはある意味で当然です。神に仕える人たちが、神に背いているのですから。

そのようなある夜、サムエルが神殿の神の箱の近くで寝ていると、サムエルを呼ぶ声がしました。彼はエリに呼ばれたと思ってエリのところに駆けつけました。しかしエリは「わたしは呼んでいない。早く寝なさい」と言います。こんなことが3度も繰り返されたとき、エリははっきり知りました。神がサムエルを呼んでおられるのだと。

それでエリはサムエルに言いました。今度呼ばれたらこう答えなさい。

「主よ、お話しください。僕<sup>しもべ</sup>は聞いております」

「3:10 主は来てそこに立たれ、これまでと同じように、サムエルを呼ばれた。『サムエルよ。』サムエルは答えた。『どうぞお話しください。僕は聞いております。』」

こうして主はサムエルに語られます。主の言葉が彼に望み、主の幻が彼に示されたのです。しかしその主の言葉の中には非常に厳しいものでした。

「3:11 主はサムエルに言われた。『見よ、わたしは、イスラエルに一つのことを行う。それを聞く者は皆、両耳が鳴るだろう。……13 わたしはエリに告げ知らせた。息子たちが神を汚す行為をしていると知っていながら、とがめなかった罪のために、エリの家をとこしえに裁く、と。14 わたしはエリの家について誓った。エリの家罪は、いけにえによっても献げ物によってもとこしえに贖われることはない。』」

主は祭司エリの家に対する審きを告げられたのです。

翌朝、サムエルは主から聞いたことをエリに伝えることを恐れました。しかしエリに強いられたサムエルは、エリに主から聞いたことを伝えます。それを聞いたエリは覚悟を決めます。

「3:19 サムエルは成長していった。主は彼と共におられ、その言葉は一つたりとも地に落ちることはなかった。」

こうしてサムエルは主の言葉を聞いてそれを人々に伝える預言者、また指導者として成長していくのです。

サムエルとその時代を伝える聖書の物語はここから始まるのですが、今はここまでとします。

今から 3000 年と少し前の時代。悪しき現実がありました。聖職者さえ墮落していました。人々には希望がなく拠り所がなく、嘆きと混乱がありました。

けれども神さまはサムエルをとおして、悪しき現実を正そうとされ、人々に道を示して希望を与え、自ら人々の拠り所となろうとされたのです。

今も悪い時代です。それだからこそ、わたしたちも祈りたい。  
「主よ、お話してください。僕<sup>しもべ</sup>は聞いております」

主の言葉を聞くことから、何かが、必要なことが始まります。神さまはここから語りはじめ、働きはじめてくださいます。

祈ります。

神さま、わたしたちがあなたの声を聞くことができるように、心の耳を澄ますようにしてください。わたしたちが考え議論しているうちに、あなたの声を聞くことを忘れることがないようにしてください。あなたのみ言葉のうちにこそわたしたちの希望があるのです。「主よ、お話してください。僕<sup>しもべ</sup>は聞いております」これによってこの 1 年を歩ませてください。わたしたちのうちに信仰を育んでください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン